僕らの視線と表現、そして版のことなど

昼すぎから冬の青空が広がったこの日、展覧会のレセプションを兼ねて、ギャラリートークを開催しました。若い方を中心に100人以上の来館者が集まる中、美術評論家の鷹見明彦氏の司会により、3人の新人作家さんたちが制作への思いや技法などを語り、時に会場を沸かせました。そのほんの一部を紹介します。

元田久治

元田：この東京駅は、両サイドにドーム状の建物があって、これは昔の東京駅ができたころの姿です。今の東京駅のドーム屋根は三角帽子のようになっているのですが、2011年末に建て替えられて昔のイメージになるので、僕はそれを見越して廃墟のイメージで作ってみました。

元田：イメージ的には何かが過去に起こった後、十数年から数百年経ち、風化して人がいなくなった後の未来の景色を想定して描いています。

鷹見：細密な描写によって廃墟を描く版画は、エッチングが多いんですよね。歴史的なことを言えば、18世紀イタリアにピラネージという人がいて、当時もやはり廃墟ブームがあって、ローマの古代遺跡をエッチングにして、一世を風靡し、今に至るまでとても影響力のある作家なのですが、ピラネージのエッチングと自分のリトグラフを比較してどうですか？

『Indication - Tokyo Station -』
2007年
リトグラフ
撮影：上野則宏

元田：僕もピラネージは意識していますが、緻密に描くのに適したエッチングより、遠目に見て分かればそれで良いという感覚なので、ドローイング的、絵画的なものの見方でリトグラフを作っています。

鷹見：ピラネージには、仰角の構図が多いですが。

元田：僕の場合は、臨場感が欲しいので、身長160センチの人間の立った時の視点で建物を描きます。誰が見ても一目見てわかるものを選んでテーマとしています。その場の匂い、雰囲気、建物の構造などは重要なので、現場を取材します。写真では出来ない表現を版画で出していこうという意識があり、これから国内だけでなくいろんな世界の場所をモチーフにしてゆこうと思っています。

小野耕石

浅葱
2008年
スクリーンプリント

小野：この作品は、近くで見ると半立体になっています。（正方形の展示ケースにパネルを置き、その上に版による作品を横に置いて見せています）ドットの版をつくり、何度も刷り上げると、どんどんインクが盛り上がってゆきます。色を変えて刷っているので、角度によって色が変化します。

蝶や蛾の燐粉の、あの輝いている、ぞわぞわとした感覚的なものが、絵の具を使って表現できないか、と思ったのが最初です。この状態までもってくるのにかなりの年数がかかっています。僕は絵画からこの世界に入っているので、コンセプトは、絵の具を使って絵の具の持つ可能性をひとつでも超えられるかどうかです。

鷹見：版画や印刷物は、インクを刷っている。出来上がりを見ると写真だったり絵だったり活字だったりするのですが、要するにすべては、インクが重なり合って層になっている。小野くんの作品は、そのことをそのまま追求していくと、インクの重なり自体が表現になっていった。支持体はなんですか？

小野：塩化ビニールです。

この本が
知的要素でのみで
成り立った今
それは
美と芸の学術として
成立し
ただ純粋に
絵を描くことを
失ったものである

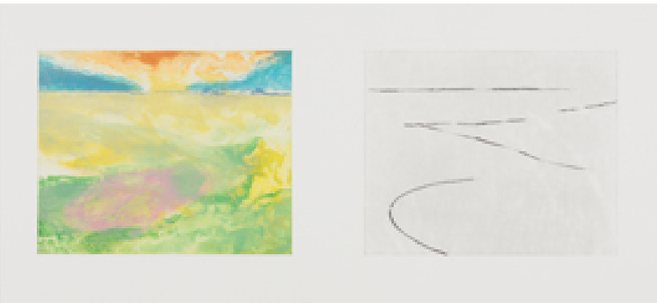
2004年
スクリーンプリント

小野：これはインクの塊です。本の知的要素は紙に刷られた活字、つまりインクです。その知的要素だけを抽出してインクだけで本を作りました。広辞苑と同じ大きさに黒いインクを刷り重ねて、表紙も別に刷って包んでいます。ページにあたる部分を刷るのに二十版で1ミリ位でしょうか。

李谷圭章

李谷：ついこの間まで制作していた作品です。黒はドライポイント、カラーはアクアチントという技法で作っています。アクアチントは四版くらい重ねて作ります。四版と言っても版は一枚で、一回刷り、乾燥させて、サンドペーパーで磨いて、もう一度製版をします。二つのイメージでひとつの作品として成り立っています。

「untitled」
2008年
アクアチント、ドライポイント



鷹見：この作品では左右のビジュアルに差があるのですが、技法の問題ももちろんありますが、それとは別に左右のイメージの差が何によるものなのか、少し話してください。

李谷：左右、同じイメージを思い描いて制作するのですが、版種によっても制作に時間差があるので、自分の中でイメージがずれて、その差が出てくることもあります。

鷹見：左右のフォーマットには、開かれた本のイメージがあるのですが。

李谷：僕も本のイメージに近いと思ったことがあります。それは、挿絵が入った本なのですが、本を開いたときに左右のページに挿絵と文字が並び、それぞれが同じ意味を含んでいるのに違う情報を持っているという点です。

鷹見：僕が想像したのは夢の中で見た映像は、色があったりなかったりと言われますけれども、それを後で辿ってみる、ああゆう操作を思わせるところもあるのですが、どうですか？

李谷：それの答えになるかどうか、僕は普段、風景を見る機会があります。それは釣りをしている時なのですが、朝方、日が出る前から川や湖に入って、一日中、月が明るくなるまでずっと同じ場所にいるのですけれど、時間の流れで光の加減などが変わってゆく様を作りたいのかなと思っています。

2008年12月13日　会場：ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション

元田久治　小野耕石　李谷圭章